



Title	中世イスパニア語のdeísmoについて
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1993, 17, p. 15-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93803
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世イスパニア語の *deísmo* について

中 岡 省 治

1. 問題の提起

中世イスパニア語には前置詞の統語法においてそれ特有の現象がみられるが、主語となったり直接補語となる名詞句が不定詞で現れる場合、その不定詞の直前に前置詞の *DE* を置くという事実があった。この現象は近代イスパニア語には継承されていないが、近年広くイスパニア語圏で記録されている *DEQUEISMO* と密接な関係をもっているのではないかとも思えるので、この中世イスパニア語の *DE* の働きを *DEISMO* と呼び、以下に簡単な考察を加えることとする。

2. *DEISMO* 「*DE* + 不定詞」の連鎖

2.1. *DEISMO* が現れる具体的な文構造

- (1) e trabajós luego *de sacar* de poder et mano de Raginfredo su principado 「彼はラジンフレッドの力と手とからその公爵領を奪おうと必死になった」 (Alfonso X pp. 106-07)
- (2) Costumbre era a aquella sazón *de criarse* los donzellos et las donzellas fijos de los altos omnes en el palacio del rey 「高位高官の子女の青年男女が王の宮殿で育つことは当時の習慣であった」 (Id. p. 106)
- (3) e tovo que era mejor *de se aventurar* a que quier quel pudiesse venir, que soffrir cosa por que se perdiesse todo 「彼は、それがために何もかもが破滅してしまうようなことを耐え忍んでいるよりも、どんなことであれ出てくることに思い切って賭けてみるほうが良いと考えた」 (C. Lucanor p. 85)

- (4) Et acordaron *de levar* una vestia en que lo traxiesen 「そして彼らは、それを運んで帰るためのラバを引いて行くことに決めた」
(Id. 64)
- (5) Et el otro non quiso ir con él fasta que le prometió *de darle* la meatad dello 「もう一人の男は、彼がその人にそれを半分やると約束しないかぎり、彼と一緒に行くとはいわなかった」(Calila p. 95)
- (6) E creo que este tal non dudará *de cometer* toda maldad como desesperado por ver si ... 「私の思うには、このような人は...かどうかを知ろうとして、絶望したようになってみさかいもなくあらゆる悪事を働くことだろう」(Corbacho p. 56)
- (7) E por ende non nos conviene *de fincar* en esta tierra ... 「だから、私達にとってはこの地に留まっているのは適当でないのだ」(Zifar p. 78)

2.2. さて、近代語の基準からみると、上記の(1)~(7)のうち(1)はまったく正常な文構造といえるが、その他のものは、DE が余剰となるだろう。

この主語としても直接目的語としても働く「DE + 不定詞」の存在は、早くから Meyer-Lübke などによってとりあげられ、汎ロマンス語的な言語事実として認識されている^(註1)。イスパニア語の場合には、Cano Aguilar が中世語に主語として機能する「A + 不定詞」の連鎖が存在することを指摘し、これに関連して、“Más general es, sin embargo, en estos casos el empleo de la preposición DE” 「しかしこのような場合、より一般的なのは、前置詞 DE を用いることである」と述べ、次のような中世語の例を挙げている^(註2)。

- (8) Et dixo a los otros que non era bien *de matarle* assi, mas serie mejor *de tomar* aquello 「彼は他の人達に、彼をそのように殺すのはよくないが、それよりもあれを取るもののほうがいいだろう、といった」
- (9) Estonce nos conviene *de fazer* lo luego 「それなら私達にはそれをすぐにすることが妥当である」
- これらの現象に現れる「DE + 不定詞」は、特に *convenir* の場合に限っ

て考えるとすれば、ラテン語にあった感情の非人称構文 (*Me pudet stultitiae meae* 私には自分の愚かさが恥ずかしく思える) にみられる人の対格と原因・理由の属格、状況の非人称表現 (*licet mihi ire* 私には行くことが許されている) にみられる人の与格と主語の不定詞、必要・妥当の非人称表現 (*nunc opus est te animo valere* 今はお前にとっては勇気を奮い起こすことが必要だ) にみられる人の対格と主語の不定詞、などからイスパニア語が受け継ぎ発達させた構造で、義務・必要を意味する迂言形式「AVER + DE + 不定詞」への意味的類似による類推も加わり、「CONVENIR + DE + 不定詞」の DE が発生したものと説明される^(注3)。しかしながら中世イスパニア語では、今問題としている「DE + 不定詞」が現れる文法環境は、この種の非人称構造以外にも広範囲に及んでいるので、ここにみたラテン語の非人称構造を出発点としてすべての場合を説明することは不可能、といわざるをえないと思う。

2.3. 上記 2.1. ですでに挙げた構造の中でもこの DEISMO が頻繁に現れるのが、他動詞の直接補語となる場合である。中世イスパニア語も近代語と同じく本来の名詞が直接補語になるとときには、人的対格を除いては、なんらの前置詞を必要とせず名詞が直接に動詞に結び付いた。

- (10) *Entiende bien mis dichos e piensa la sentencia* 「私の言葉をじゅうぶんに理解し、その文の意味を考えろ」(LBA. 46)

しかしながら、名詞に代わって不定詞が直接補語に立つときには、義務的とはいえないまでも、頻繁に不定詞の前に前置詞の DE が現れた。

- (11) *Buenos caualleros sodes, penssat de ampararuos et defenderuos*
「あなたがたは優れた騎士なのだから、己を守り保護することを考えよ」
(Alfonso X p. 121)
- (12) *juraron a algunas de las tomar por mugeres* 「彼らは何人かの女達に、彼女らを妻に迎えると誓った」(Corbacho. p. 89)
- (13) *yo quiero ser llave de su prisión y determino de siempre querer*
「私は彼の心の鍵になりたい、そして永遠に愛することを決心する」
(Cárcel p. 90)

このように直接補語となる要素の文法範疇の違いによって前置詞 DE の使用が条件付けられ、これをかなり規則的に示す動詞と、中世語でもすで

に「CUIDAR + 不定詞」のようにもっぱら DE を伴わない構造を示すものがあるが、後者は少数派である。また、この二種類の直接補語表示の形式は中世語のみならず、16・17世紀に入っても依然として続いた。H. Keniston (1937) は、六十数個の動詞をこの種の二重構造をとりうるものとして挙げている^(注4)。筆者がごく狭い範囲内で調査した限りでも、そのうち三十余個がみられた。こうした出現の状況をみても、この統語法がかなり定着したものであったことが分かるであろう。この種の動詞を示すと、次のようになる。ACABAR, ACORDAR, ACOSTUMBRAR, APRENDER, ASMAR, CESAR, COBDICIAR, COMENÇAR, CURAR, DEMANDAR, DEMOSTRAR, DESESPERAR, DETERMINAR, DEXAR, DUDAR, ESPERAR, FUIR, JURAR, PENSAR, PROMETER, PROPONER, PUGNAR, QUEDAR, SABER, TEMER, TRABAJAR, USAR で、これに、上記の非人称表現に使われる動詞、CONTECER, CONVENIR, CUMPLIR, PESAR を加えることが出来る。

3. 名詞節を導く QUE と DE との関係

3.1. 中世語にはこれまでに述べた DEISMO に関係すると思われる事実がもうひとつ存在する。近代語の基準からいえば DEISMO として位置付けれる DE は余剰でしかないが、これとは逆に、中世語では名詞節を導く QUE の直前では、主動詞が要求する前置詞 DE が脱落してしまう、という現象があった。従って QUE が導く名詞節が直接補語になる場合と、その他の名詞句 - ここには不定詞も含まれる - が補語に立つ場合とでは、同一の動詞の補語についても前置詞 DE の使用の点で差があった、ということになる。

- (14) *et quexose de esto a los filósofos de los reyes de India* 「彼はこのことをインドの王達に仕える哲学者に訴えた」(Calila p.100)
- (15) *et por esta razón que non se quexasse de yr a lla eglesia* 「このようなわけだから彼が教会に行くことを嫌がらないようにと」(C. Luca-nor p. 96)
- (16) *Mas vezes se quejava que estaba mal por huir los plazerres* 「彼はそれ以外に何度も、その人が喜びを避けようとして気持ちを乱している、といて嘆いた」(Cárcel p. 89)

(17) *temime de la non poder sufrir* 「私はそのことに耐えられないのではないかと恐れた」 (Calila p. 114)

(18) *ca se temie quel podrie ende uenir periglo* 「彼はそのことから危険が生じるかもしれないと恐れた」 (Alfonso X p. 107)

この前置詞 *DE* の出現・削除のパターンは上記のようないわゆる中間態の動詞の場合のみならず、すでにみた単独の他動詞の場合にも規則的に現れる。

(19) *yo prometo de nunca olvidar* 「私は決して忘れないことを約束する」 (Cárcel p. 90)

(20) *ella le prometía que, (...), faría ella todo lo que él mandasse* 「彼女は彼が命令することすべてをすると彼に約束した」 (C. Lucanor p. 247)

3.2. この *DE* の脱落現象は *QUE* が形容詞の補語になる名詞節を導く場合にも起こる。中世語では、近代語と同様、形容詞が *SER* などの繫辞動詞と組んで述部を構成したり、独立的に用いられて名詞(句)の補語をとる場合には、前置詞を介してこれを導いた。ここに用いられる前置詞はいうまでもなく *DE* が多かった。しかるにこの補語が *QUE* の導く名詞節であれば *DE* は例外なく削除されている。

(21) *et es seguro de ser non tentado* 「そして彼は自分が試されないものと確信している」 (Calila p. 114)

(22) (...) *por omne del mundo, nin por ninguna manera, non puedo un día solo ser seguro de la muerte, et so cierto que naturalmente, segund la mi edat, non puedo vevir muy luengameute* 「この世の誰の力によってもまたどんな方法によっても、一日たりといえ私は死を免れることが出来ないし、また私は、当然のこと、この年齢からみて長くは生きられないということが、はっきりと分かっている」 (C. Lucanor p. 68)

この *DE* の動きは、形容詞・名詞が *SER* と組んで非人称表現に使われる場合にも当てはまる。

(23) (...), *lo que les era ligero de ganar de los enemigos dezían que non podían conquistar por ninguna manera.* 「彼らにとって敵から勝ち

取るのがたやすいものでも、彼らはどうしても征服出来ないといった」
(Zifar p.62)

- (24) (...), justo es *que* la maldad se castigue porque la virtud se sostenga 「美德が維持されるために、悪が罰せられるのは正しいことだ」 (Cárcel p.114)
- (25) (...) es grave cosa *de* se mudar lo que viene por natura ... 「生まれながらにしてあるものを変えるのはむずかしい」 (Alfonso X p.97)
- (26) es menester *que* lo afirme bien, et que entienda lo que leyere 「彼がそれをしっかりと頭にいれ、かつまた読むであろうことを理解することが必要である」 (Calila p.92)

3.3. QUE の導く名詞節と前置詞 DE との関係については、先行名詞と同格節をなす場合にも面白い現象がみられる。近代語では、名詞と同格節とは通常は前置詞 DE によって結ばれ、これが削除されることはまずない。しかしながら、中世語では繋ぎの DE が現れることはほとんどなかった^(註5)。これは次の諸例が示すところである。

- (27) (...), quando llego *el mandado* a los romanos *que* Annibal non querie descercar a Siguença ... 「ハンニバルがシグエンサの包囲を解こうとしないという知らせが、ローマ人に届いたときに」 (Alfonso X p.79)
- (28) et yo he *esperança* *qu'él* será mejor servido *que* de otros algunos 「私は彼が他の誰からよりももっと丁重に奉仕されるであろうとの期待をもっている」 (Calila p.129)
- (29) e téngolo so el mi lecho, e non lo oso aquí soterrar por *miedo* *que* nos lo sepan ... 「そして私はそれを寝台の下に置いているが、そのことが分かってしまうのではないかと危惧するものだから、それをここに埋めようとは思わないのだ」 (Zifar p.129)
- (30) Mas ovo *dubda* el rey *que* seyendo el Urías sabydor de tal maldad *que* a su muger cruelmente mataría e David quedara frustrado 「しかし王は、ウリアスがそのような悪計に通じた者であったので、残酷なやり方でその妻を殺し、ダヴィデが欺かれることになるのではないか、との疑念をもった」 (Corbacho p.79)
- (31) (...), lo cual va por *razón* *que* de tu hermosura se cree lo uno y de

tu condición se espera lo otro 「そのことは、あなたの美貌からはひとつのことが考えられるが、あなたの人格からは別のことが期待される、という理由によっているのである」(Cárcel p. 95)

3.4. 中世語でも早くから接続詞句として固定化していた「副詞 + QUE」の構成をとるもの、ANTE[S] QUE, DESPUES QUE, LUEGO QUE なども ANTE[S] *de* QUE... となることはなかった。

- (32) y después *de* besalle las manos recibí su carta ... 「そして私は彼の手に口付けをした後に、彼の手紙を受け取った」(Cárcel p. 109)
- (33) Verdat te digo que esta noche ante *que* cante el gallo, me negarás tres vezes 「まことに私はいふ。今夜雄鶏が鳴く前に、あなたは三度私を否む」(S. Mateo 1, 26, 24)
- (34) luego *que* tuvo la lança, fue su via tras Vellido ... 「彼は槍を握むやすぐに、ベジドの後を追って道を行った」(Alfonso X p. 125)
- (35) y después *que* sopo de mí lo quel otro, diome lugar a que entrase 「彼は私からもう一人が知っていることを知ったあとで、私に入るための許しを与えた」(Cárcel p. 86)

4. 「助動詞 + 不定詞」の連鎖の場合

伝統的に”助動詞”と位置付けられ不定詞と組んで現れるものの代表として PODER, SOLER をみると、ここには DE を伴った不定詞は皆無である。

- (36) enantes que yo muera, algún bien vos *pueda far* 「私が死ぬ前に、何らかのいいことをあなたがたのために出来るように」(Cid 320)
- (37) ¡... e prender maquilas, commo lo *suele far*! 「そして彼がいつもしているように、粉ひき代をもらえばいい」(Id. 3380)

勿論のこと、ここでいう“助動詞”とは、その直後に置かれる不定詞が名詞や人称代名詞対格中性形などの名詞同等語句と置き換えられない、という統語上の特徴をもつものに限定される。この種の助動詞としては、中世イスパニア語には早くから AVER, DEBER, SER, TENER などがあったことがよく知られている。近代語でも、「未来・必要・義務・予定…」など、時制・叙法的な意味を示す助動詞として維持されている「AVER

DE + 不定詞」の形式は、中世語では「AVER + ϕ /a/de + 不定詞」の変異形の一つであった。こうした接合の形式のうちで AVER が不定詞と組んで助動詞として働く場合の基本となる形は、中世イスパニア語では「AVER + 不定詞」と規定することが出来るであろう。これは語源的な形式にも一致し、またこの二要素の機能上の特徴を明示するのにも好都合となる^(註6)。

(38) E yo non me marauillo porque *he murir*, ca non so yo el primero nin el postrimero ... 「私は死ななければならないからといって驚きはない。というのは、私はそうなる最初の者でも最後の者でもないからである」(Zifar p.116)

(39) Ca se perdió lo que se *auía a perder*, e por aventura que lo rescebió Dios para sí 「というのは、失われるべきものが失われたのであり、またおそらくは神がそれを自分のために取得されたのである」(Id. p.134)

(40) Et por razón *óvole a dar* los cient maravedís 「そして当然のこととして彼はその人に百マラベディを与えるべきであった」(Calila p.113)

(41) el que amare que non solamente a su coamante *de dar tiene*, mas a otras ciento *ha de contentar* 「愛する男はその相手に与えるだけでなく、他の百人の女をも満足させなければならない」(Corbacho p.57)

なお、このような枠組みを設定し”助動詞”として用いられる動詞には不定詞との結合のうえで、異形が三種類あると仮定した場合、上記のもの以外に中世語では、COMENÇAR (やこの異形 COMPEÇAR) など、AVER と同じ働きを示すものがあったことをも指摘しなければならない。しかしこの、COMENÇAR などの動詞は一般の名詞を直接補語とする構造をもとるので、機能的には二種類の COMENÇAR があると考えておく必要がある(Querémosvos un otro libriello *començar* 私達はもう一冊の話の本をあなたがたに読み語りたい; S. Domingo 289)。

5. 動詞の被制辞としての前置詞

5.1. このような動詞とそれが要求する前置詞にみられる組み合わせの違いは、ラテン語からロマンス語への変化の過程で生じた構造的な変

化によるものである。ラテン語でもすでに、動詞が補語として要求する格形式にしばしば交替が生じたといわれている。このように不安定な局面をもった格形式が、ロマンス語では前置詞によって置き換えられることになる。しかしながら、この格形式の代替手段となった前置詞そのものも、体系的には不安定な部分をもっていたと考えられる。他方では、ラテン語に生じた動詞の補語となる格形式の交替も、それぞれに意味の微妙な変化と密接に関係して生じたものであろうし、これを反映させた結果として、カステイリア語でも前置詞を活用した点は、正しくロマンス語の一般的な傾向に倣ったものである。いうまでもなく、特定の前置詞の選択に際しては、その出発点では前置詞そのものの意味が大きく作用したにちがいない。このような経過をへて中世語に現れた動詞の被制辞としての前置詞は、たとえば、動詞 *CREER* では（前置詞なしで直接に補語をとる場合をも含めて）、次のような組み合わせを呈することになった^(註7)。

- (42) *en ti crovo al ora* 「彼はすぐにあなたの存在を信じた」(Cid 357)
- (43) *El conde, que nunca delas abusiones creyera, nin menos de tales señales* 「伯爵はまやかしを信じたことなどなく、ましてやそのような兆しなどを信じたことなどなかったが」(Laberinto 168)
- (44) *que crouiesse sos nuevas de Mio Cid que avie algo* 「彼が戦利を得たというミオ・シドについての風聞を信じるようにと」(Cid 1791)
- (45) *a ti adoro e creo de toda voluntad* 「私はあなたを心から敬い信じております」(Cid 362)
- (46) *E los godos que fasta alli crouieron a la uanidat de los ydolos* 「その時まで偶像の虚妄を信じていたゴート族」(PCG. p. 227)
- (47) *creó que asil dizía verdat en todo lo al* 「彼はその人がほかのすべてのことでは、彼に真実をいっていると思った」(C. Lucanor p. 80)

5.2. 上記のようないくつかの現れ方をする補語の形式は、動詞の意味する動作・過程と補語によって示されるその対象との関係の違い、を精密化する働きをしている。一般的にみて、動作・過程の対象、内容がそのものとして解釈されるときには直接補語に、それが比喩的な場所として把握されるときには *EN* が、動作・過程の理由、動機と解釈されるときは、*DE*, *POR* などが、それぞれの意味関係を特定化するために用いられた、といえる

であろう。

このように、近代語では他動詞として固定化しているような種類の動詞でも、中世語では相当に柔軟な統語法をみせ、重大な意味の違いをもたらすことなく、直接補語をとる場合から、前置詞を介して補語をとる場合までが記録されていることが多い。こうした事実があるにもかかわらず、一方で、すでに指摘したように「他動詞 + DE + 不定詞/ ϕ + QUE」という統語現象がかなり高い確度で現れてくるのは、いかなる理由によるのであろうか。

ラテン語では基本的には不定詞は前置詞と共起しなかったこと、また直接補語に不定詞をとりうる動詞も多かったことを考慮すると^(註8)、この「DE + 不定詞」の存立の理由は中世カスティリア語そのものにある、と考えるのが妥当ということになる。

6. 中世カスティリア語における補語の形式と不定詞

6.1. 中世カスティリア語でも他動詞の直接補語として機能しうる形式には、次の三つの可能性があった。

- (48) a. Espero tu *explicación*.
- b. Espero tu *explicar*. /^(?)*explicar* tú.
- c. Espero *que* (tú) *expliques*.

6.2. 今ここで、上記の三つの違った形式をとる直接補語の文法的特徴をみると、その内容は決して一様でないことに気が付く。

上の文では直接補語は、(48 a.) では単一の名詞、(48 c.) では名詞節によって表されている。このように補語に立つ語、語句のカテゴリーの違いは、いうまでもなく、その補語の核となる語に対する付加可能な要素の差、となって現れてくるといえるだろう。また、このカテゴリーの違いは、たとえば(48 a.) の *explicación* はそれ自身では「時」を意味する能力はないが、(48 c.) の動詞定形 *expliques* では「時」はすでに、その形式に固有の意味の一部となっていることにも明らかのように、意味形成の広がり、となっても現れてくる。こうみると、不定詞が直接補語に用いられる場合(48 b.) は、他の要素との接合の可能性からみて、名詞的でもありまた動詞的でもある、といわねばならない。これは不定詞の機能上の特徴

として言い古されてきたことでもあるが、特に中世イスパニア語では、近代語に比べて不定詞の名詞的機能への傾斜度が大きかったともいえるので、ここで、不定詞の機能的多義性を再度確認しておくことにする。

- (49) *Adúzenle los comeres, delant ge los paravan* 「彼らはその人に食べ物を持ってきて、それを彼の前に置いた」(Cid 1019)
- (50) *Otros ovo y que estudieron ya mas despues en esta razon del aorar de los elementos* 「この四大をあがめるという信心をその後もずっと堅くした、そんな人達もほかにいた」(Alfonso X p. 114)

6.3. すでにこれまでにみたように、イスパニア語では早くから QUE が補語標識として用いられていたが、これは名詞節を導く場だけでなくその他、幅広く従属関係を表す副詞節(目的, 譲歩, 条件, 理由など)をも導くことが出来た。なかでも、特に直接補語として機能する名詞節を導く場合の QUE は、その余剰的な用法にもみられるように、補語標識として積極的に作用していたといえる。

- (51) *ca bien fio por la su merced, que si ge lo rrogamos, que nos lo dara* 「というのは私は彼の慈悲心にかけて、もし私達が彼にそれを頼めば私達にそれを与えてくれるだろうということを、信じて疑わないので」(Engaños p. 5)

これに次いで、直接補語として用いられる名詞節中の動詞の叙法も、補文標識の一部をなしていたと思われる。いうまでもなく接続法がこの標識であったが、近代語に比べてより多く^(註9)、従属節中の叙法として積極的に接続法が採用されたと考えられる場合があるのは、注目に値する。特にイスパニア語としては接続法とは積極的に結び付かない意味範疇に属する動詞(ASMAR, CREER, CUYDAR, PROMETER など)が、その直接補語とする名詞節に接続法を認めるという現象も、中世語の補語表示の手段と考えられないだろうか。

- (52) *Pues que fue casada, creed que se non arrepienta* 「彼女はもう結婚したのだから後悔などしないと、あなた考えてください」(LBA. 710)
- (53) *et desi pidieronle mercet que los perdonasse, et prometieron le que numqua usassen daquellas artes* 「そこですぐに彼らは彼に赦

免いただきたいと願い出、また彼に、決してその呪術を使わない、と約束した」(Alfonso X p.72)

(54) E non sé qué me faga contra vuestra porfía 「私はあなたの頑迷さにどう処置すべきか分らない」(LBA. 670)

(55) No sé qué faga, perplexo esté 「私はどうしていいのか分らない、困ってしまう」(Celestina I p.103)

また中世語でも頻繁に現れる現象ではないが、名詞節を導入するための QUE が脱落することもあった。これが、名詞節中の動詞が接続法をとる場合にほぼ限られているのも、接続法の機能を象徴する場合といえるかもしれない。

(56) y por esto te ruego mucho te *trabajes* en salvar mi fama y no mi vida 「このような訳で、私はお前に、私の命ではなく名を救うため尽力してくれるよう、お願いをするのだ」(Cárcel p.127)

ここに挙げたように、中世語では従属節として文を上位の文に組み込むときには、補語標識としての QUE だけではなくそれ以外の文法手段を積極的に用いる傾向にあったと考えておきたい。

6.4. これに対して、不定詞はその性格付けが曖昧で、それ単独では従属節の一つの現れとして無条件に文中に組み込むことが出来ず、一つの条件を満足させる必要があったのではないかと思われる。つまり、不定詞を動詞の補語として動詞として用いる場合、それを可能とする最低の条件は、不定詞が表す動作・過程の主体が明示的に組み込まれているかどうかにあったようである。この点を構造的にみると次のようになる。

A) 文構造的に主動詞と同一の動作主が設定されるときには、不定詞は動詞として先行動詞に直接に、連結要素の必要なしに接続されたといえる。これが上記の「PODER/SOLER + 不定詞」の連鎖にみられる場合である。しかし、連結要素をもつ連鎖もあり、その代表的なものは「AVER ϕ /A/DE + 不定詞」であって、これはイスパニア語を初めロマンス諸語が発達させた構造といえる。併せて、近代イスパニア語で多用される「IR・VENIR...+ A + 不定詞」にみられる前置詞 A は、中世語の初期には不安定で、IR など“運動”の意味の動詞は直接に不定詞をその直後に従えることも出来たが、この事実も、完全な動詞として機能する不定詞の文中へ

の現れかたを示すものとなろう^(註10)。

- (57) *Vayamos posar, ca la cena es adobada* 「我々は休むことにしよう、夕食の用意もできたので」(Cid 1531)

B) イスパニア語は早くから、“知覚・感覚”，“使役”の意味をもつ動詞を主動詞とする不定詞構文を固定化させていた。この構造では不定詞の動作の主体の表示は義務的になるので，その動詞としての機能の決定についてはなんら問題はなかったと考えられる。この場合で使われる不定詞に DE が前置されることは稀であった。

- (58) *et estauan catando e marauillandose de la marauilla, que nunca uieran nin oyeran de uolar omnes* 「彼らはその魔訶不思議なことを眺め目を見はっていた，というのはそれまで人が飛ぶのを見たことも聞いたこともなかったからである」(LLME. p. 124)

- (59) *¿Por que fazes de tardar a nuestro compañero?* 「なぜお前は私達の仲間を引き止めるのか」(Engaños. p. 57)

C) 中世カスティリア語にはまたそれ独特の統語法として，主動詞とは異なる主語を表に示す不定詞構文があった。しかし幅広く用いられた形式ではなく，すでに「QUE + 直説法/接続法」が一般的な表現形式としてあったので，これに完全に代替されてしまうことになる。

- (60) *E si as urgencia de ser yo tu mugier linda, ten me por barrangana* 「それでもしあなたが，私に早くあなたの可愛い奥さんになって欲しいのなら，私を側妻として迎えてください」(Alfonso X p. 88)

- (61) *E ally conviene ser perdida la muger, ser mala por se mantener a sy e a sus fijos* 「そういうことのために女が身を持ち崩すこと，まは，自分が罪を犯すことの原因となると知りまた分かっている，いかがわしい場所やそんな機会や人を避けなさい」(Id. p. 71)

- (62) *fuye los deshonestos logares, los tienpos, e las personas que tu sabes o puedes entender que son causa de tu enduzir a pecar* 「お前は，自分が罪を犯すことの原因となると知っていたりそうだと分かる，いかがわしい場所やそんな機会や人を避けなさい」(Id. p. 71)

- (63) *E sabe, si no sabes, que dos conclusiones son verdaderas. La primera, que es forçoso el hombre amar a la muger e la muger al hombre* 「お前もし知らないのなら，次の二つの結論が真実であるという

ことを知っておけ。その最初は、男が女を女が男を愛すのは必要止むを得ないこと、ということである」(Celestina I pp.94-95)

7. 結論

さて、これまで中世スペイン語に頻繁に現れる他動詞の直接補語となる「DE + 不定詞」の連鎖について簡単に考察した。近代語では不定詞は動詞の非人称形の一つとして機能的には動詞の範疇に属する項目と見なされているが、中世語ではいまだこのような明確な位置を確保していなかったものと考えられる。このような多機能的な不定詞を特定の機能に指定するため DE が現れたと仮定すれば、この DE は不定詞動詞化の標識となるだろう。ここから次の諸点が結論される。

A) 不定詞が先行する動詞と直接に連鎖を構成する場合 - ここには AVER ϕ / A / DE + 不定詞のような場合をも含める - には、PODER, SOLER, QUERER などとの連鎖にもみられるように、不定詞は先行する動詞と主語を一にする動詞として働く。

B) 「DE + 不定詞」の連鎖では、DE は不定詞の動詞化を明示する働きをする要素と考えたい。ここでいう“不定詞の動詞化”とは、機能的に不定詞が主動詞と同一の主語をもつことであり、ここから不定詞はすでに屈折的であり、従ってこれは上位の文に組込まれた節に等しい働きの不定詞である、ともいえる。

C) 一つの言語単位の本来的な機能を拡大し働かせる場合、その新しい役割を指定するための標識が必要とされる。完全な文を名詞節に指定するためには、イスパニア語では早くから、QUE, COMO, SI などの標識が使われたが、同様に不定詞を動詞に、しかも主動詞と同一主語をとるものとして有標化する手段として DE があった。

D) 「DE + 不定詞」と「QUE + 文」とが“名詞節”の具体的な表出であり、DE と QUE とがそれぞれに、違った文法的資格の要素を“名詞節”に指定するための標識であるとしたら、与えられた役割の場の違う DE と QUE とが、同一の文法環境に現れ連鎖をなすといったことはありえなかった、と結論できるであろう。

E) しかしここにみた中世イスパニア語の補語を導く要素としての DE と QUE との間の機能配分は15世紀末から崩れ始め、DE QUE ... の連鎖

が現れてくる。近代語の時代に入ると、“補語”として働く不定詞を有標化するための DE の使用は後退してゆくが、ここで新たに DE は、伝統的な補語標識の QUE の補強要素としての機能を帯びることになる。これが DEQUEISMO^(註11)の発生を促すことになった、といえるかもしれない。

- (64) Si es verdad lo que sospecho, decídmelo, que os juro, por la fe de caballero que profeso, *de* ayudaros y serviros en todo aquello que pudiere. *De que* no seáis mujer no me lo podeis negar ... 「私がそうではないかと思っていることが本当なら、そうだといって下さい。私はその業いとする騎士の誓いにかけて、出来うるかぎりのことであなたを助けあなたに仕えることをお誓い申します。あなたが女ではないといっても、女であることをあなたは私に否定は出来ないのですよ」(Cervantes, N. E., p. 141)

註 記

- (1) Meyer-Lübke (1974), III, §§ 340 y 389 ; たとえばフランス語では, *Il est bon de parler et meilleur de se taire* 「語るのはよいことだ, 黙るのはもっとよい」(『フランス語ハンドブック』 p. 123) のように, 「DE + 不定詞」の連鎖が維持されている。また, イタリア語にも, 「di + 不定詞」が主語として働くことがあるといわれる(『現代イタリア文法』 p. 267)。
- (2) Cano Aguilar (1777-78), pp. 337 y sigts. ; Hanssen (1966), § 705 (p. 303). なお, Feldman (1974) も別の観点から「DE + 不定詞」の連鎖を扱っている (pp. 73 y sigts.)。
- (3) Cano Aguilar (1777-78), p. 338.
- (4) H. Keniston (1937), § 37. 53, (p. 356); Feldman (1974) も通時的にこの種の構造を記録している (pp. 76 y sigts.)。なお, この論文からこの「DE + 不定詞」の連鎖が近代語では急速に後退することが確認される。
- (5) 近代語にもわずかに DE を削除した同格節の表現形式がみられる。しかしこの形式は許容度が低いようである。
El *hecho que* esta ciudad perteneciera al "Commonwealth" me pareció un magnífico augurio. (Juan Ramón Ribeyro, *La palabra del mundo*, p. 34); Y en ésta cada día se sentía mejor a *punto que* siguió postergando su retorno a Lima...(Id., p. 200)
- (6) V. Väänänen (1970), § 303, (pp. 212 y sigts.); A. Yllera (1980), pp. 92 y sigts. ; Cano Aguilar (1988), p. 158.
- (7) ラテン語の格形式がイスパニア語で, 前置詞によってどのように処理されたかという問題については, Rafael Lapesa (1964) が詳しく扱っている。動詞の補語となる

格形式の代替要素となった前置詞と動詞との関係については, Cano Aguilar (1977-78), pp. 334 y sigts.

- (8) 松平・国原 (1968), § 150 以下。なお, ラテン語では *Vincere scis* 「お前は勝つことを知っている」のように不定詞が使われることも多かった。なお Feldman (1974) は, ラテン語で直接補語に不定詞をとった動詞のリストをも挙げている (pp. 226-27)。
- (9) 中世イスパニア語では, 近代語で不定詞や直説法の動詞が用いられる環境に, 接続法が現れることが多かった。この中世語の特徴については Javier Elvira (1987) を参照のこと。なお個々の用例については, 江藤 (1992) が詳しい。

なお, *perjúrase el homne, non comide que diga* 「その人は偽証をする, なんていうべきか分からないので」(Apolonio 53) のような接続法の用法は近代語にも残っているが, 標準的な語法では, ... *no sabe qué decir* とすることであろう (宮本. 1991, p. 23)。

- (10) A. Yllera (1980), § 2.3.3.4., (pp.170 y sigts.); なお「運動の動詞+不定詞」の連鎖に現れる前置詞 A については, 特に p. 175 を参照のこと。

alla va prender ostal 「彼女はそこで宿をとるだろう」(S. M. Egipciana 149) に対して, *la van a veyer* 「彼らは彼女に会いに行く」(Id. 173) があったが, 後者は後発形である。

- (11) Esbozo (1973) は, *Me dijeron de que saliese* の DE は“余剰”, *No me hagas de reir* の DE は“誤用”といっている (p. 522)。なおこのイスパニア語圏全域にみられる DEQUEISMO に関しては, Kany (1970), § 352 ; Seco (1987), p. 134 ; Lauchalan (1982) が詳しく扱っている。

[なおこれは、1991年12月24日の関西イスパニア語研究会の例会で発表した“中世イスパニア語のdeísmoについて”の内容を見直し改めたものである]

用例抽出に用いたテキスト

Alfonso X.: *Obras de Alfonso X el Sabio* (Selección), edición de Francisco J. Díez de Revenga, Madrid, Taurus, 1985.

Apolonio: *Libro de Apolonio*, edición de Carmen Monedero, Clásicos Castalia, No. 157, Madrid, Castalia, 1987.

Calila: *Calila e Dimna*, edición de J. M. Cacho Bleuca, Clásicos Castalia, No. 115, Madrid, Castalia, 1984.

Cid: *Poema de Mio Cid*, edición de Lan Michael, Clásicos Castalia, No. 75, Madrid, Castalia, 1984.

C. Lucanor: Don Juan Manuel, *El Conde Lucanor*, edición de José Manuel Bleuca, Clásicos Castalia, No. 9, Madrid, Castalia, 1972.

Cárcel: Diego de San Pedro, *Cárcel de amor*, edición de Keith Whinnom, Clásicos Castalia, No. 39, Madrid, Castalia, 1970.

Celestina: Fernando de Rojas, *La Celestina*, edición, introducción y notas de Julio

- Cejador y Frauca, Clásicos Castellanos, 20, 23, Espasa-Calpe, Madrid, 1972.
- Corbacho: Alfonso Martínez de Toledo, *Arcipreste de Talavera o Corbacho*, edición de J. González Muela, Clásicos Castalia, No. 24, Madrid, Castalia, 1970.
- Engaños: *El libro de los engaños*, edited by John Esten Keller, revised edition, University of North Carolina Press, Chapel Hill, 1959.
- LBA.: Arcipreste de Hita, *Libro de buen amor*, edición de G.B. Gybbon-Monypenny, Clásicos Castalia, No. 161, Castalia, Madrid, 1988.
- LLEM.: F. González Ollé, *Lengua y literatura españolas medievales*, Barcelona, Edit. Ariel, 1980.
- PCG.: *Primera crónica general de España* editada por Ramón Menéndez Pidal, Gredos, Madrid, 1956.
- S. Mateo: *El evangelio de San Mateo*, edición de T. Montgomery, Anejo VII del Boletín de la R.A.E., R.A.E., Madrid, 1962.
- S.M. Egipciaca: María S. de Andrés Castellanos, *La vida de Santa María Egipciaca*, Anejo XI del Boletín de la R.A.E., R.A.E., 1964.
- Zifar: *Libro del Caballero Zifar*, edición de J. González Muela, Clásicos Castalia, No. 115, Madrid, Castalia, 1982.
- Cervantes, N.E.: Miguel de Cervantes, *Novelas ejemplares III*, edición de J.B. Avalle-Arce, Clásicos Castalia, No. 122, Madrid, Castalia, 1972.

参考文献

- Cano Aguilar, Rafael: "Cambios en la construcción de los verbos en castellano medieval", *Archivum*, XXVII-XXVIII (1977-78), pp. 335-379, Oviedo, 1978.
- : *El español a través de los tiempos*, Madrid, Arco/Libros, 1988.
- Cuervo, Rufino José: *Diccionario de construcción y régimen de la lengua castellana*, Bogotá, Instituto Caro y Cuervo, 1954.
- Feldman, David M.: *Apuntes históricos sobre las frases verbales de modo en español*, Edit. Playor, Madrid, 1974.
- Fukushima, Noritaka: "Sobre dequeísmo y queísmo", Nara, 1989 (mimeografiado).
- González, Javier Elvira: "Sobre la extensión del infinitivo en el español antiguo", *Anuario de Letras*, XXV (1987), pp. 151-156, Mexico, 1987.
- Hanssen, Federico: *Gramática histórica de la lengua castellana*, Ediciones Hispanoamericanas, París, 1966.
- Hernans Cardó, María Luisa: *El infinitivo en español*, Departamento de Filología Hispánica de la Universidad Autónoma de Barcelona, Barcelona, 1982.
- Kany, Charles E.: *Sintaxis hispanoamericana* (versión española de M. Blanco Alvarez), Madrid, Gredos, 1976.
- Keniston, Hayward: *The Syntax of Castilian Prose*, Chicago, The University of Chicago Press, 1937.
- Lapesa, Rafael: "Los casos latinos: restos sintácticos y sustitutos en español", *B.R.A.E.*, t. XLIV, pp. 57-105, Madrid, 1964.

- Lauchalan, Jessica M.: "Dequeísmo y queísmo en el habla culta de Lima", *Lexis* VI (1982), 1, pp. 11-25, Lima, 1982.
- Lightfoot, David W.: *Principles of diachronic syntax*, Cambridge University Press, Cambridge, 1979.
- Meyer-Lübke, Wilhelm: *Grammaire des langues romanes*, II, III, Laffitte Reprints, Marselle, 1974.
- Real Academia Española: *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 1986.
- Seco, Manuel: *Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española*, novena edición renovada, Espasa-Calpe, Madrid, 1987.
- Trujillo, Ramón: "Nota para un estudio de las preposiciones españolas", *Thesaurus*, t. XXVI (1971), pp. 2-48, Instituto Caro y Cuervo, Bogotá, 1971.
- Väänänen, Veikko: *Introducción al latín vulgar*, Gredos, Madrid, 1967.
- Yllera, Alicia: *Sintaxis histórica del verbo español: las perífrasis verbales*, Departamento de Filología Francesa, Universidad de Zaragoza, Zaragoza, 1981.

江藤一郎『中世スペイン語の間接疑問文における接続法』天理大学学報 (171), pp. 47-64, 天理、1992.

松平千秋・国原吉之助『新ラテン文法』南江堂 東京 1969.

宮本正美『スペイン語接続法入門』厚進社 大阪 1981.

新倉俊一他『フランス語ハンドブック』白水社 東京 1990.

坂本鉄雄『現代イタリア文法』白水社 東京 1990.